



日夏耿之介全集

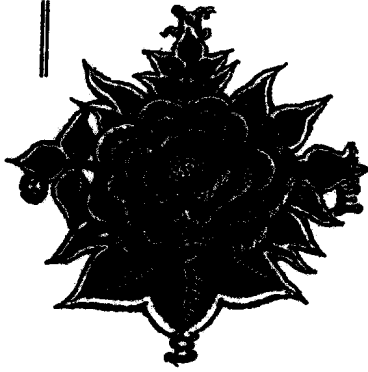
河出書房新社

監修

矢野峰人

山内義雄

吉田健一



第六卷

美の司祭

日夏耿之介全集 第六卷 ©1975

一九七五年六月二〇日印刷 一九七五年六月三〇日發行

定價……………八八〇〇圓

著者……………日夏耿之介

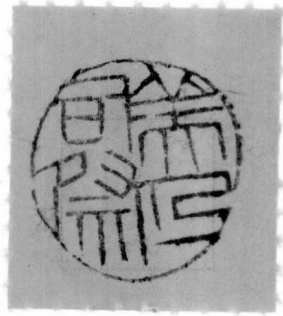
裝畫……………長谷川潔

裝本……………杉浦康平・鈴木一誌

發行者……………中島隆之

發行所……………河出書房新社

東京都千代田區神田小川町三十一六 電話〇三二九二三七一 振替東京一〇八〇二
3395—437006—0961



第六卷 美の司祭 目次

叙……………3

凡例……………7

緒説……………9

第一章—浪漫的懈怠の心理……………17

第二章—自然詩の客觀性の問題……………67

第三章—古陶詩の軌近性……………139



第四章—神話詩の現實的迫力……………233

第五章—英吉利鬱悒詩情の究竟頂……………291

第六章—夜鶯に因る快吉感の誕生……………355

第七章—オウド展開史上キイツィヤン・オウドの位相……………439

結語……………450

ジョン・キイツ年譜……………455

解題……………475

索引……………477

第六卷

美の司祭

美之司祭敘

この研究は、大正十一年四月から昭和十年十二月まで早稻田大學文學部在職の間、數年にわたつて繼續した英文學專攻科の JOHN KEATS 講義に胚胎する。大體に於て、原講義よりも鑑賞味解に於て麤に、文獻考覈に於て密となつてゐる。大正癸亥の大震災以後、とかく病弱の間努めて登壇その職を曠うせざらむとしたものであるが故に、案外行歩起立する肉體的懸念にも緻細な情操の自由なる流露を阻まれ勝ちで、犀利の味賞をよく精到に人に傳へ得なかつたかに追憶される。原來抒情詩鑑賞の講述は、創作感興に類する本質に出立する情念の湧出に肇まるから、時にいしくも適切にして細やかな表現を良く發明し得た場合でも、之をさりげなく述べ去れば、受業の士も亦之をさりげなく聴き流し、若干の創意ありと自ら信じる玩賞とても、折目高く改めて述べるは好ましきわざでないから、従つて口演すれば従つて銷落し、詳かに記述の態を成すものとは残らないので、一瞬の間に減卻し去つて再び之を文字に移す機會はつひに無かつた。之を自ら愛惜するといふ程ではないが、學界の末人として立ち、それに依て祿を喰んで、如何に講義し如何なる業績を残し得たかを一般に向つて

報示するも社會的責務の一なるべしと心得、之を述作化して江湖に提唱しようと先づ考へた。その内の一二は當時學部關係の刊行物に掲げたが、それらはいつも咄嗟に際して二週日をも經ざる内に脱稿を餘儀なくする必要に迫られるを常とした爲、十分の警正推敲を施し得なかつたのを心ひそかに恥ぢ、更に稠密に更に大規模に形を擴げて存録しようとして、爰に KEATS が一代の詩風のさながらの縮圖であるその ODES とその文學とのみを、悉皆一括して之に日本人たるわたくし自家の詩人的立脚地から鳥瞰景を作り成し宿説を闡明しようと思ひ立つた。然るに、昭和六年來稀有の大患に罹つて容易く快氣に及ばず、その病態は講壇を隱退して服藥を煮なければならぬ程度迄に立到り、一時全くこの企圖を放下し去つたが、昭和十一年孟春、奇疾いつ果つべしとも見すかされぬので、適まこの世に因あつて生を享受した一期の思出に、せめて餘す所なく後生の爲に書き遺さうと考へ、折からやや病勢解りしを奇貨とし、新たに布局を按じ筆を呵して冬蟄の南窓に業を舂め、昭和十二年春に至つて大體そのつとめを終へた。なほ病輕からぬ間は削定を繁くして簡記し (INDOLENCE 篇のごとく)、病快氣するにつれ次第に旁證を詳かに細敘した (PSYCHE 篇のごとく)。或る期間はさまざまの窳愁の間に一字一句遺文を認める心持で筆を執つた事もあつた。衰殘困厄の裡に稽古精進した覺ある讀者は首肯せられるであらう。さきに一旦公表した二研究は、改めて新資料の下に再檢し之に訂譌刪潤を施し、著作年代の關係から自ら軌近のそれとは述作の成態を異にするふしもあるもので外篇として巻後にとどめ、爰に KEATSIAN ODES の大觀をほぼ完うする事を得た。この創作心理とその前後脈絡

との追蹤的研究は、今日まで未だ我國では全く發達してゐない。これは今までの英詩研究が、單に字句の訓義を一步も出でざるものでなければ、西人の祖述にすぎない記問之學が大部分であつた所爲であり、ここにわたくしの假に試みた困絶の小研究は、次代に展開せらるべき大道のための一つの寒陋なる棄石ともなるであらう。焉に北米南洋等異邦に生れ異國に育つてその國籍を有する同胞が職を我國に求めて來任した時、殊方の EMIGRE として、わたくしの研究方向とは正反對の立場から日本詩歌を比照研究する事が將來あるであらう事をわたくしは空想する。そしてこの種の比照研究（嚴密には比較方法をつくしたとは言はない）が彌々大規模に稠密に深化展開されてゆくことを推想する。この種の研究は、キイツ文學に於ては、西洋にも多くはまだ存せず、近刊 RIDLEY, FINNEY 一家の著にその片鱗が示されるのみで、ODE の MONOGRAPH とつても DOWNER の小冊子がわづかに一部あるのみであるが、その ANALYSIS とは分析に非ずして要略的語解の本意にとどまつてゐる。さて、恰もこの完成後と時を等しうして昨秋十月の比さる國手の診を受けて宿痾俄かに去り、却而病前數年間よりも適かに心身爽快なるを覺えるに到つた。わたくしは衷心から皇天に感謝するの情を禁め得なかつた。漆者不畫といふが、輓近俚淺の文學物情の間介在して、一個の詩人として世に終始して來た事を特に光榮となし幸福ともなすもので、今その他の業績に全力をそそぐは固より囚首裏面し而詩書を談じるのみなる菲才わたくしの到底よくなしうる所ではない。ただ、大正昭和の二朝十四年間にわたる講壇生活の直産物として、又三十年間の作詩生活の半面の消息として之を公表する

機會を進むで摺むだ事をも亦信じてよろしからう歟。前人の未だ言はざる新見も考覈
味解の間にそくばく存するが、先蹤學匠等のより、早くより、巧緻に表白してゐるやも知
り難いので、出来るだけ、或は老婆心に近いまでひろく斯學文獻を博搜しその言説の
異同を類別綜覈し、(それでもかなり多くを割愛して切り棄てたが) 自説の佳き裏書
とも又興味深き對象ともなした。雅より古代西詩を、東邦人の立場から品藻したもの
故、他流仕合の不つり合な感じを脱れぬふしは尠からずあり、對比その當を得ざるの
刺も亦従つて受けねばならぬであらうし、自説の性急なる主張もあらうが、矮子看場
の勦説は固より無く、雷同附和も全くないつもりである。ただ構思行文の間、思量措
辭の訛謬蹉躑と亥豕之譌とあるを心ひそかに惧れる而已。江湖大雅の叱正教勸を得る
ならば至幸である。

昭和十三年二月

月黃聽雪廬ニ於テ

日夏耿之介識

凡例

一 本研究の所依テキストは THE POEMS OF JOHN KEATS edited with an Introduction and Notes by E. DE SÉLINCOURT with a Frontispiece in photogravure published by METHUEN AND CO. LTD, London, 1920, Fourth Edition, Revised 2基^カ 2^キ THE POETICAL WORKS OF JOHN KEATS edited with an Introduction and Textual Notes by F. H. BUXTON FORMAN, published by HUMPHREY MILFORD, OXFORD UNIVERSITY PRESS, 1924 を併用し、そのオウドの大部分が収録せられた千八百二十年板詩集の石印覆製本 THE NOEL DOUGLAS REPLICAS JOHN KEATS POEMS, 1927 を参照した。

一 『鬱悒賦』 ODE ON MELANCHOLY 及び 『夜鶯賦』 ODE TO A NIGHT-INGALE は、後者は昭和二年七月發行『文學思想研究』第五卷で「ハムステッドの夜うぐひす」と題し、前者は昭和三年十一月發行『文學思想研究』第八卷に『美しき鬱悒』と題して掲載した舊稿に新しく雌黄を加へ剪裁を施して、キイツ・イヤン・オウド研究の完璧を期したものであるが故に、他の本文とは姑く別にして外篇として巻後

に収録した。

- 一 本文の研究は、すべて昭和十一年一月に起稿して、大體昭和十三年四月の候に脱稿し、更に推敲を加へ削訂を施したものに係る。
- 一 夜鶯篇研究舊稿中のナイティンゲイルと黄鳥と宇久比須との文學的對照は別にうつして最終卷尾に附録とした。
- 一 分析的批判に當つては、英文學プロバアの古今文獻をなるべく多く對比する外に、日本及び支那の古詩歌の創作心理上の場合を、必要に應じて比照批判せしめた。
- 一 餘儀なき必要の場合に限り、やむなく希臘拉甸伊太利亞佛蘭西獨逸等の詩歌の事例を比照したが、これは全く専門外であるにより、極めて少數の範圍を、自分の所有する負しき知識で料理しうる限りにのみ引證した。
- 一 舊稿の初めのもの『ハムステッドの夜うぐひす』は昭和二年五月朔日その稿を脱了し新稿の最後のものは亦夜鶯篇であり、外篇第二としての研究は、昭和十三年三月九日原稿としての最後の刪修の筆を擱いた。
- 一 索引は本田安次氏の丹念懇切な手に成つた。厚くその勞を謝する。

緒説

これは分析の書である。一人の若き英吉利浪漫主義の天才が、その天賦の詩才に最も相應はしいと一般に思惟される詩形であるところのオウド ODE の一體を採り用ひて、英詩史無前の「無意識的悟性」の極致をよく發揮したる詩歌の道の歩みの跡を跟つけるに、著者は彼が作詩完成時の形態を以てして、第一解から序次を踏んで、詩感展開の必然性と少數のその蹉躓との原態を究め乍ら、主として力を作者の増補と削除との剪裁上の可否、一つの解から、次の解に推移するインタヴァアルの深切な雄辯性への解釋、並びに起句もしくは破題の成功無成功の實蹟如何、及びその結語もしくはエピログとの因果關係の様子を、なるべく作詩家の立場に寄り添つて、傳記的資料と批判的基礎とを根元としつつ、著者自らの詩作經驗に照して、これらの煩瑣な絲筋を手繰りながら、飽くまでも解剖分析を職として、自然に赴く道ではあるが、強ひて綜合歸納の明らさまな努力の方面にその關心を轉じることには敢て試みむとはしなかつた。もしかかる少數の場合が其處にあつたとしたならば、それは細部解析の論を行ふ必要の上から、允される範圍で自然に施されたものに外ならない。尤も、多く

のキイツ文獻に接するより杳か以前、キイツ詩集を初めて手にした頃から、夙くも今日の結論と大體に於て變らないものが、著者の心内に既に去來し磅礴してゐた事はまぎれない事實であつた。この原初の芽生に、形式と自省とを加へたものは、多くの先蹤學者の立言である。それ故に、單に自分のキイツのオウド論を物する事ならば、僅に數頁にして足りるのであるが、著者の輓近の興味は、單なる一家の結論の揚言にあるのではなく、むしろこの一日本詩人の有する結論と多く同系の贊成説、並に全く對蹠の立場に立つ反對論とを、出来るだけ丹念に精査して、甲乙兩種に分れるそれらの所論に鳥瞰景を與へ、自分の總收語の位相の全豹を一氣に闡明せむと欲するところに存する。けれども、上述の如く此分析の書の使命として、それらキイツ文獻キイツ學者の所説は、行論の必須の際のみに隨意に採り用ひる方法をとつたから、それだけとしては或は跛行的に近いものとなつたであらうが、それは著者の最初から介意懸念するところでなく、只管分析の Field Work の間に、生平の宿説を實驗教授のプリンシプルとして雕出したいと冀望したのであつた。本邦の詩學もしくは詩歌に關する所

説は、太だ乏しく稚く拙くて、著者はわが無知を培養するために、多く先人の所言に據らんと欲して、不幸にもかかるものを殆ど發見することが出来なかつた。それ故、ある點では大膽に未拓の荒地を趁る感がなくはなかつたけれど、それらは又他日後生の學匠によつてそれぞれ賢明に是正せられることと信じる。

抑々、我邦で初めて文學史的意識の下に文學論を物したのは、明治維新後二十年を經過した後「小説神髓」が公にせられた際のことであつた。あだかも、その年前後に、獨逸に於ては近代詩學に心理學的基礎づけの「試み」をなしたところのデルタイの想像力に關する興味ふかい小論が續出した際であつた。一は建設的啓蒙で、一は新創的建設である。兩者の間には實にこれだけの開きがあつた。しかし、稚き「小説神髓」が意味深く出現したその砌、殆ど時を同じうして、恰もその見本として出現したかの感があつた小説「浮雲」は、近歐小説史のその比の頁の間に對應させても、決して見苦しい過小價値を示すものではない。中世以降、日本人の感情を固化しその自由な表現を礙げたものは儒教であつた。儒教は自然兒日本人に道義的陶冶と訓練とを與へ、その感情生活に嚴しい試鍊を加へた大功はあるが、本來敏感なこの國民の感覺と情感と想像力との發揮を躊躇せしめ、その表面的意圖を鈍からしめたものは、儒教特に道學規矩の感情及び想像生活上ストイシズム的實行がその責務を負はねばならぬ。維新後二十年間の歲月は、この方面の感情感覺の窓の開放期でもあつた。いち早く開

いた窓の扉の一つがこの「浮雲」に外ならない。開放は何げないやうで、實は骨の折れる仕事であつた事實を、吾々は信じなければならぬ。千八百九十年代（明治二十年代）に於ける一葉とルナルとの日誌を比べると、一は如何にして表さざるべきかと嘆き、一は如何にして表すべきかと嘆いてゐる。このハンディキャップを凌いだ上に、吾々日本人は、文學史的にもしくは論理的理解に先行して、無意識的にもしくは半無意識的味解に依つて、夙くも十分に近い程度に、近代藝術の本質と原則とを把握し領略してゐたのであつた。ただ、社會圖卷の揮灑と心理描寫の精寫とに尙太だしく拙かつた爲に（これは文學史的意識の發展の順序として、次第にその巧致を加へるのが自然であるからやむをえないのである）。吾々の半世紀の小説文學史は、近歐のそれに比べて著しく貧寒を極めてゐるが、今までの業績が、直ちにこの方面に、民族的缺陷を示してゐると獨斷されえない。むしろ、それらは今後の展開に俟たなければならぬ事情にある。原來、吾等東方人の賦性は、小説のやうなひたすら精刻を要する文字の場合にすらも、しばしば局部の情致にこだはつて、一見その局面の布置を、内包的に印象主義的に抒情してゐるかのやうな特色を示す場合すらある。更に端的に民族的特異の風格を打開したる鷗外の高瀬舟文學の如きは、何處と云つて部分的に佳所はないが、而も全體が居然として一塊となつて局所的なる美しさを發揮し、そのぢりぢりと體押しをして諸者に迫る内包的の力と含蓄の美とは、この小説をして東方的の沈靜な典雅精刻莊重なインクルウン

うな美しさに十分かがやかしめてゐる。こんな様式に於ける、こんな文體の小説は世界にも尠い。こんな文學が産出されただけでも、貧しい明治文學史を優に十分に賑はしたものだといはねばならぬ。これはストオリイを淡々と物語る間に自然に沁み出る、個人的の而して民族的の意志と感情との獨自の持味で、西洋文學に於ては、單に短篇機構の力と美との所在が、これに類似したものはあるが、かくの如き沈潜せるポテンシャルティの文體美に輝く金臺に燻しをかけたごとき凝つた滋味のあるものは、洵に稀少な類例しきやなく、本邦にあつて數世紀にわたつて産出した隨筆文學といふ一類の立派なカテゴリーから、恰も必然的に産出されたかの如くに、自然の態勢で矯出的に生れ出た民族それ自體のものであつた。

かかる本質の最高のストオリイを世界に生むた、日本近代の文學を所有するわれら日本人の見地から特に言へば、英吉利人の文學の中で十分直截に共感しうるものといへば、近英の小説戯曲よりもむしろ近英詩歌とエッセイとをあげねばならない。一般價值から見ても、此二者が全大陸文學中で一きは鮮かな特色を示してゐる。俗に碎け乍ら相當とすまして、獨特のドライ・ヒュウマアを恬然と冷やかに談るところに、アングロサクソンのエッセイの棄てがたい妙味がある。彼等にとつては、英吉利近代エッセイはその小説よりも杳かに文學である。極言すれば、近代歐洲文學史の間から、英吉利小説部を除くのはやむをえないとするも、そのエッセイを除外するわけには斷じていかない。近代英吉利人は、そのエッセイと詩歌と

で文學を行つて來てゐると稱して不倫ではない。吾等の關心は、その實證的なる哲學史を綴りつづけて來た近世英吉利人が、半面ミスティックの思惟を宗とする詩人の多きこと、及び、十九世紀全般にわたつて、つひにミッド・ギクトオリヤ朝中庸文學の空氣に浸潤しながらも、時として英人には珍しい敢爲矯激の言爲をなすものを、鬼子のごとく（而もその實子にはちがひない）産み出しつづけてゐたといふ歴然たる事實にある。バイロン、シェレ、キイツ、ベドワズ、トムスン、ロゼッティ、スキンバアン、ワイルド、ビヤボム、オウシヨネシイ等の人名表が擧證である。英吉利人らしからぬ半面を有つ才人團であるが、その英吉利人である事はまぎれもない。而も最も英吉利的なる文學的特色は、やはりこれらの人々によつても、ディケンズやヘアデイと同じく、十分發揮せられたのであつた。シモンズのエッセイの美の如きは、本來純英吉利國産のものとは言ひかねるものであるが、これを大陸と比べてみる時は、追がにアルビオンの白堊の國土から生れ出た感情と思想とが、やはりその美の主要根幹をなしてゐるといふ事を、心のリズムの重味の上に氣づかずには居られぬ。もし佛蘭西風の近代詩感を旨として考へる時は、百川朝宗の感じが先入するから、あだかもキイツ已來世紀末にわたる一彙の輓近藝術は、悉く佛蘭西的感化から發生した、英國産文學としては、一つの異端にすぎないかの感じをつよく有つ事もあるが、一たび文學比較の立場から、佛獨伊近代文學の鳥瞰景を眺望するときは、英文學プロバアの邪宗の徒としてこれを見做すよりも、

英文學そのもの自體が、鈍角ながらも近代大陸運動に根幹から揺ぶられ初
して、漸くその立場に於ける變相を示したと見る方が、餘りにも光つたこ
れら才人團の近代英文學に於ける重要な位相に照して、より妥當な洞察で
あるといふべきであらう。牛津宗教運動にも、加特力と詩美との間にアン
グロサクソンの民族性が大きく働きかけてゐる。ラファエル前派藝術運動
にも、美術の手法と觀點との問題以外に、英人獨自の感覺のうごきが底力
となつてうごいてゐる。二十世紀に入つて漸く知的に活潑になつた、彼等
の著しく全歐的なる文學傾向一般を精査すれば、百年の昔夙くも、それら
のひこばえが民族獨自の風格を持して、漸次に大うねりに漸層的に生じつ
つあつた事實に氣がつくであらう。即ち、過去一百年は、英吉利人にとつ
て、大いなる新しい文學魂の試鍊期であり妊孕期であり展開期であつた。
政治的には漸次没日期に際會しつつある彼等は、その頂點を二十世紀初頭
に於て通過して了つたが、而もそれとともに、文學世代の進展は、この世
界大のひろがりを維持する廣治民族の中心生活の、まぎれもなき個人的叫
びを、端的に示す文學精神の展開の道程に於て、全く過去一百年の英吉利
が、留目すべき新展開の途上にありつづけたのであつた事を表し、その自
然必須の展開は、民族的自負にもかかはらず、弱小國の大文學家イプセン
によつて世紀末英國劇を改造させられ、外交上の、時にはライヴアル、時
には情婦である佛蘭西の小説家等の手によつて、同じ比の小説に率直と明
察との態度的反省と科學的精刻とを賦與せられ、(その橋わたしをしたも

のにジョオヂ・ムアがありギゼトリがありシモンズがありゴスがある。)。
その他、同じ血脈を延くこと色濃き日耳曼人や、彼等の所謂東方的なる
露西亞人や、純血拉甸的な伊太利亞人によつて、その文學の隅々まで詳部
にわたつて、近代大陸文學精神の受洗のために一臂の力を假さしめた。か
くして、鈍重傲岸たやすくは動かざる性のアングロサクソンも、徐ろにそ
の適時の轉回を示し、ギクトオリヤ女皇朝の大小波瀾を閲しつつ、一
百歳を航過してつひに今代に及んでゐる。(東方血脈としてのマジヤアルの
ベエテヒをわれらは忘れない。)

この大轉回、最も資するところ多かつたものは、上述本國文學の大異
端であるかの外觀を呈してゐる一群の詩人らの存在であつた。尠くとも、
彼等がその動因を興へるに夥多の力があつた事は争はれない。この興味あ
る文學的通景の眞正面にジョン・キイツが在る。コオンウオオル系の庶人
の家の出自であるとされてゐる。が、固より名高い家柄ではないから、遠
き血脈のややこしい混交の跡は確かには見定めがたい。尠くとも、英吉利
文學に恆に一味の清風を漂はす純愛蘭土種直系の色濃き投影は、その尊屬
親にはなかつた。にもかかはらず、その繊細な感受性と、富瞻な想像力
と、鋭感な感覺とによつて、同時代を感悟し、民族の特色を十分發揮し乍
ら、民族的約束を超越して近代を體感し、こまやかにして深切な預言的氣
稟を勁く示したのは、英吉利民族に於ける詩的天稟を、沙翁とともに最高
度に具現した浪曼底格の純血な天才の行實であつた。さういふ業績を残し
たその短い一生に、少數の物語的なる詩歌とオウドとが、特にその文學的

異色を發揚せしむる便宜を有つてゐた。物語ることの詩的興味は、小説の敘述とはちがつて、抒情し乍らも、事象の系列に正しい敘事的序次をつけて述べてゆかなければ効果的でないから、作者は敘述することの上に、詩歌の天受の特技を有たなければならぬ。換言すれば、事件の敘法が自然に抒情的形態を示さなくてはならぬ。その意識の臭味がつよいと、讀者は急に反感を催して、通俗的なる民衆歌謡のくどき文學や和讃文學や道行文學としきや受取られ得ない。近代の拙劣なバラッド詩人が、この陥罪にみな落ちて無殘な失敗を遂げてゐる。キイツに部分的に感化された群小詩人にその例が多い。かれらに一樣に通俗的臭味がつよいのは洵にこの爲である。外觀はキイツと鳥渡もちがつてゐないのである。この時鈍感な鑑賞者は、かかる作者の膚淺な表面美と、キイツの深切な内面美との微妙な異差を鋭く感得することが出来ないで、淺墓にもこれらを一つらのものに粗莽に見なして、恬然とキイツ文學を輕視するに到る。多くの根柢なき在來の反キイツ論者は皆此埒内に在る人々であつた。

オウドに於ては、本來發聲前から、最高の抒情の態勢に氣構へてゐるべき詩體であるから、勁烈な熱意で、一氣に強引に自信を有つて揮灑し去らねばならない約束を持つてゐる。その間些しの逡巡を允さない。一旦躊躇すれば、白熱の詩情が忽ち冷却して、ただ蒼然と冷い説明に墮したる月並詩體の斷章がところどころ冷え残つて了ふ。これがオウド詩風の獨有の特色である。理智的なる詩風を怡ぶものの中にキイツが怡ばれず、尠くとも

必要以上に輕視せられるのはこの爲である。が、これはキイツその人の精神生活に冷靜な理智的觀照が尠い事の左券ではない。寧ろキイツは、原來人間としては、自省熟慮の人であつた。それは彼の書翰を見れば判明する。この點が、彼をして孤り儕輩の友パイロンやシエレのやうな驕激な實行行動に出でしめなかつた所因であつた。しかし、彼は凝然とよく落附いて、常に内部で深刻に反逆してゐた。悲壯劇的なるその反逆を飽くまで言動にはあらはさずに、内証的に内に内にと只管秘めかくして、その内外の矛盾に吾れと自ら苦しみ悩む人であつた。ただ、オウドといふ獨自のスタイルと内面の詩情とが必至呼應した時、卒然として彼はこの熱意エンthusiasmの人と變化した。何が故にこの發作があつたかは興味興味のふかい問題である。餘りにハムレット的なる彼の性格なればこそ、この稀なる熱意の時を巧用する事の特殊の幸機を有ちえたのであつた。彼にとつて、このオウドの一ときは、正しくその恆に踟躕逡巡する實行的人生に於ける、一の大膽なそれへの接觸であり、又それよりの爆發であり、實人生そのものであつた。それだけの深い意味が、キイツ的なるオウドに特にいらひどく含まれてゐる。この種の内部的なる靜謐な魂の詩人にあつては、實人生に對する接觸的役割は一見太だ稀少であつて、何處に人生と相わたるものがあるかとの設問さへ生じ勝ちなものであるが、かかる場合こそ、その稀なる貴き一の佳き機會に外ならなかつた。常に安易に日常生活を寫實的にうたふ平面的な詩人は、この種の機會は有たない、また有ちにくい。餘りにも直接に、

*